

# 虎視

# 眈々

こじったん  
「虎視眈々」  
KOSHITANNAN

直接聞かされた自民党政調会長の山崎拓も、山崎から伝え聞いた幹事長の加藤敏一も「まさか本気じゃないだろうな」とちよっぴり不安になった。社民党の辻元清美(三宅)の願望だ。

「私、シングルマザーになりたいねん。大きなおなかを抱えて国会に登院するんや。そのくらいやらんと、国会は変わらん」

永田町の感覚ではいかにも「突飛」な行動や発言を、辻元は次々と繰り出す。周りは怒ったり、はらはらしたりするが、いつの間にか渦に巻き込まれてく。■

そんな辻元流を自いっばい發揮したのが、三月に成立した特定非営利活動促進法(NPO法)だった。

一九九六年に初当選したころ、法案の協議は足踏みし、内容も市民団体側から見ると欠陥だらけだった。客船で世界を回って国際交流をめざす「ピースボート」の設立者の一人として、十億円規模の予算を動かしてきたが、法人格がないため、

契約相手の船会社から「怪しい団体」と疑われることもしばしばだった。

「これが最優先の仕事」と思い定め、二人の自民党幹事長を「標的」に据えた。

一人目は加藤。七年前にテレビ番組で顔を合わせたことがあった。加藤が設けてくれた初当選祝いの席で、辻元はNPO法の必要性を二時間ほどぶたした。

自民党の法案づくりがもめた時は、携帯電話を鳴らした。加藤は散髪中だった。「こんな自民党じゃあ、あかん」

「そんな話は政調会長としてくたよ」

次は参院自民党幹事長の村上正邦だった。「村上さんが反対している、参院で法案が審議入りできない」と聞いた辻元は、議員要覧で住所を調べ、いきなり電車に乗って埼玉県志木市の自宅に向かった。ところが、対応に出た村上の妻は「村上は麹町の議員宿舎におります」。その場で電話した。

「いま、村上さんの家にいる

## ピースボート流、永田町をゆく



「あんだ、そんなこといって何してるんだ」

かまわずしゃべり続ける辻元に、村上は「わかった、わかった」と答えるしかなかった。

辻元の無手勝流は、ピースボート時代から周囲をうならせてきた。

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)にコメを支援しようと思いい立ち、約束もないまま北京の北朝鮮大使館に飛んだ。玄関前で関係者を待ち伏せて交渉に持ち込み、ピースボートの寄港を認めさせた。内戦のカンボジアでは、会員の乗ったバスが、ジャングルで数十人の武装民兵に止められた。相手は酔っ払いで威嚇射撃までする。それでも「バスを通せ」と粘った。

人生の変わり目は、九六年の衆院選が公示される一週間前にかかってきた土井たか子からの電話だった。

「悪いけどちょっと手伝ってほしいことがある」

土井の選挙なら、個人的に何回か手伝ったことがある。「何でもしますよ」と答えたら、「候補者をやって」と土井は言った。

民主党建生で分裂し、小さくなった社民党の「市民派候補」。党がスカスカになっていたいまなら、この器を市民政党に変えられるかも」と思った。ピースボートには別れを告げた。

初めての社民党大会。全国の党員でホールがいっぱいになる

## 突飛さと結果主義 「ライバルは野中広務や」

のを見て、辻元が考えたことは「全国に支店がある大会社と同じや。すごい財産や」だった。

NPO法が成立した日、辻元の携帯電話を鳴らして「よくやったよ」と声をかけた加藤は、「社民党にはめずらしい結果重視型。ピースボートで億単位の金を扱った経営感覚がいきいている」と見る。

NPO法が成立した時、本会議場で立ち上がりお礼をしたら、自民党から「スタンドプレーだ」と批判された。一月から幹事長代理になった。党内からはさっそく「市民、市民」といったって、参院選の候補者が立てられるのか」という陰口も聞かえてくる。

そんなときは「ライバルは野中広務や」と自らを奮い立たせる。幹事長代理といえは、自民党なら野中、民主党だって鳩山由紀夫が占めるポストだ。

そんな辻元を、社民党の長者、村山富市は最近「社民党を復活できるのは辻元しかないかも。次の党首候補の一人だ」と真顔で評するようになった。

辻元本人はどうか。

「国会議員は十年間が旬やと思うわ。その間は首相でも何でもめざして頑張る。でも、それを過ぎたら家庭の立ち食いうどん屋になるつもりや」

周囲の視線を意識しているのか、していないのか、わからないのが辻元流だ。(敬称略)